

## 9. 高知県立大学「県民大学」学生プロジェクト「立志社中」の採択と活動

### 1) 健援隊の活動

健援隊の活動目的は、専門知識をわかりやすく地域の方に伝え、知識の普及と健康文化の醸成であり、立志社中プロジェクト設立時の 2013 年より活動している。プロジェクトでは、活動を通して地域の方との関係性を構築しつつ地域の要望を取り入れながら継続的に課題の解決に取り組んでいる。今年度は、1~4 回生まで 41 名の学生が活動を行った。

#### (1)活動目標

- ①香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と健康寿命向上に関する知識、方法の共有や災害の備えについて一緒に考え、住民の方のセルフケア能力の向上を支援することを目指す
- ②香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と減災に備える意識の向上を目指す
- ③園の方と子どもが自分の健康について興味関心をもてる健康教育活動を目指す
- ④地域の住民の方と AED の知識や使用方法に関する知識の普及を目指す

#### (2)活動内容

- ①香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と健康寿命向上に関する知識、方法の共有や災害の備えについて一緒に考え、住民の方のセルフケア能力の向上を支援することを目指す

隣接する神池地区と柳瀬地区は、病院までの距離が遠いこと、近隣に入院病床がないため、入院が必要になると住み慣れた地区を離れざるを得ないという医療上の課題がある。住民の方々にとり入院を防ぎ「住み慣れた地域で健康に暮らしたい」ということが健康ニーズの一つとなっている。そのため、住民自ら体調管理に取り組めるよう、送付するお便りでは熱中症を取り上げた。

現地への訪問は、神池地区 2 回、柳瀬地区 1 回であり、健康活動として、血圧測定、健康体操の実演や誤嚥・窒息の予防と対処法、折り紙を住民とともに実施した。また、継続して健康チェック表の作成と送付を 3 か月に 1 回行った。また、2 回生 5 名が中心となって取り組み、地域の方は、延べ約 20 名参加されていた。

- ②香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と減災に備える意識の向上を目指す

地区内を住民の方と一緒に歩き、避難時に危険な個所（苔で滑りやすい、石垣が倒れてくる）を確認し、後日住民の方に写真を提示しながら意見交換を行った。また、住民の方と備蓄品や災害時の炊き出しについて話すことができた。柳瀬地区の住民からは、可能であれば、来年度炊き出しをしたいという要望が聞かれた。

- ③園の方と子どもが自分の健康について興味関心をもてる健康教育活動を目指す

今年度は、高知市五台山保育園と高知愛児園において活動を行った。教育内容については、子どもたちの保育園での過ごし方、興味関心があることなど事前に子どもたちについて理解をした上で、教育内容を検討することに努めた。各保育園で各 3 回、子どもたちと共に遊び、保育園の日課に取り組む子どもと交流を図った。子どもたちの様子や園の職員からの意見を踏まえ、健康だよりでは「熱中症」や「バランスの良い食事」について配布した。また、健康教育は「睡眠」「バランスの良い食事」「手洗い・うがい」についてクイズを交えて行った。小児の活動では、2 回生 4 名が中心となって活動に取り組んだ。

- ④地域の住民の方と AED の知識や使用方法に関する知識の普及を目指す

AED 講習に先駆けて、高知市消防局の協力を得てメンバーが救命講習を受講した。講習を受けて AED の使用においては、周囲への応援要請、AED と胸骨圧迫を併用することで効果が上がることなど、ポイントについて整理して、紅葉祭の参加者に対して AED を含む救命講習を行った。

#### (3)活動の評価

- ①香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と健康寿命向上に関する知識、方法の共有や災

害の備えについて一緒に考え、住民の方のセルフケア能力の向上を支援することを目指す

住民の方からは、地区にしながら自分の健康状態を知ることができる機会は、日頃から自身の健康管理に興味関心をもつ住民の方々にとって、新たなセルフケア能力の向上のきっかけ作りとなっていると考えられた。

②香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と減災に備える意識の向上を目指す

初回の訪問で現地の危険な箇所を確認したため災害時のリスクについて住民の方に納得していただけ様子であった。ただし、防災対策の充実を図るための提案や具体的な活動には至っていない。話し合った内容を踏まえ、備蓄品や今後の炊き出しについてお便りで提案する予定である。

③園の方と子どもが自分の健康について興味関心をもてる健康教育活動を目指す

健康教育では、事前に五台山保育園と高知愛児園に事前調査として訪問し、園児の保育園での過ごし方を観察したことで子どもの行動、認知の特徴をふまえた教材作成に取り組むことができた。学習会では、毎回 10～20 名の年長児、年中児の参加を得た。子どもたちは集中して聞いている様子であった。また、学習会後にお便りを配布した時は、真剣に声に出して読み上げている様子や分かった内容を学生に知らせたりしており、関心を持って学んでいる様子であった。

④地域の住民の方と AED の知識や使用方法に関する知識の普及を目指す

救命講習は、一定の期間が経つと忘れてしまうため、住民を対象に定期的に知識の普及を図ることが必要である。健援隊の活動目的にも合致するものであり、今後も継続していく。

#### (4)今後の課題

より効果的な活動を行うため、学生の活動のタイミングと地域側の受け入れのタイミングがズレないように大学の年間行事、授業日程などと地域側のイベント等を踏まえた日程調整を早期から行いスケジュールを立てていく必要がある。今年度は、活動に必要な書類作成が期限間際になってしまったため、余裕をもって活動できるよう学生に働きかけていく。

今年度は、1 回生の学生が活動に参加できるように呼び掛けていたが、講義や学生の予定により都合がつかず、現地での活動は 2 回生のみであった。2 回生からは、前年度からの引継ぎが不十分であったとのことから、学年間でのコミュニケーションをとる機会を積極的に持ち、新しい年度のメンバーがスムーズに活動できるようにしていく必要がある。

## 2) いけいけサロン活動の活動

「いけいけサロン活動」は、看護学部 4 回生 6 名、2 回生 6 名、1 回生 5 名の計 17 名で活動する結成 10 年目のチームである。今年度のプロジェクトの目的「安心を考える：池地区で安心して暮らすことができる、知識を持ちより意見を尊重しあう、安心して活動ができる」を掲げて、地域の方々と学生が共創した実践可能な活動を行った。

### (1) 活動目標

- ①一人一人が安心して活動できるようにそれぞれの意見や言葉を大切にする。
- ②互いに無理のない範囲で安全に楽しみながら、継続できる活動を行う。
- ③互いに尊重しあい、相手を理解しようとする姿勢を続ける。
- ④毎回の活動終了後に振り返りを行い、次の活動に活かす。

### (2) 活動内容

上記 4 つの目標の到達に向け、以下の活動に取り組んだ。

#### ① 毎月のチラシ配布の継続

池地域の町内会と協力して、毎月チラシの配布を行った。住民の方に、サロン活動開催の案内や季節に応じた話題や脱水予防などの注意喚起を行い、見て読んで楽しめるものを作成していた。

#### ② 池地域でのサロン活動

池公民館、大学で計 6 回のサロンを開催した。池公民館でのサロンは、季節の折り紙や七夕といった活動しながら交流を深めるとともに本活動についての意見などを話し合うことができた。11 月のサロン活動では、大学祭に招待し災害時の避難場所である大学を身近に感じてもらえた。

#### ③ 深掘り活動（池さんぽ・聞き取り調査）

池地域の避難経路・避難場所の実態を把握するために「池さんぽ」を行い、避難経路や避難場所にある危険箇所や災害時に活用できる場所を見つけることができた。さらにサロン活動の中で災害への思いについて聞き取りを行った。8 月の南海トラフ地震臨時情報「巨大地震注意」を体験したことで、災害を現実捉えて不安や危機感が高まっていることがわかった。

#### ④ ペットと災害について

災害時に備えて「ペット用の迷子札」の試作品について住民の方々に意見をもらい、ペットにも負担がかからない迷子札の改良点が明らかになった。

### (3) 活動の評価

#### ① 毎月のチラシの配布の継続

2 回生を中心に 1 回生と協力して今年度も毎月かかさず配布することができた。学生は町内会代表の方と接し、締切や持参の仕方などを学ぶことができた。

#### ② 池地域でのサロン活動

それぞれのサロン活動で、学生は高齢者である住民との会話の仕方や、健康管理の方法、生活上の工夫を理解し、それをふまえた活動を検討することができた。それぞれの学年が専門科目での知識を生かし、案を持ちよったサロンを行うことができた。

#### ③ 深掘り活動、ペットと災害についての活動

自分たちで現地の散策、試作をすることでより具体的に検討することができた。さらに、検討した内容をもとに住民の方と意見交換することで新たな課題の発見ができた。

### (4) 今後の課題

地域住民の方と学生の「つながり」をつくりたいと、多様な活動を発案し、地域に出向いた取り組みを継続できた。今後の課題は、住民の方との「つながり」がさらにひろがることを目的に多様な年齢層の人や人数が増えるような活動の仕方を検討していくことである。

## 3) UOK 手話サークルの活動

「UOK 手話サークル」は結成 5 年目のサークルで、令和 5 年度より立志社中プロジェクトで活動している。本年度は、看護学部 18 名、社会福祉学部 28 名、健康栄養学部 3 名の計 46 名で、より多くの地域の方に手話を「言語」として理解してもらえるように取り組んでいる。

### (1) 活動目標

- ① 継続して手話を学び続け、聴覚障がい者に対する理解を深めると共に手話の技術を習得する。
- ② 聴覚障がい当事者である講師の補助をすることで、聴覚障がい者とのコミュニケーション方法の特徴や教え方のコツを学ぶ。
- ③ 絵本を使用し、学生だけでなく、様々な年齢の方々に手話や聴覚障がい者の方と関わってもらう機会を提供する。

### (2) 活動内容

#### ① 手話の勉強会を実施

木曜日の 18 時より新入部員も増えたことで、ゲームを交えた手話を行うなどしながら楽しく、指文字や単語を学べるように勉強会を実施した。また、第 19 回全国手話検定試験に向けて、手話通訳者で卒業生の徳永旭さんを招き勉強会を実施した。その結果、2 級 2 名、3 級 1 名、4 級 5 名が合格した。

## ②紅葉祭で手話歌「カイト」を披露

「カイト」の手話歌の動画を撮影し、部員が気楽に参加できる環境を整えた。勉強会の時も練習を実施した。直接手話歌には参加しなくても、模造紙に歌詞を書いたりその模造紙を当日に持って参加してくれたりした。また、当日は交流を続けている高知県聴覚障害者協会青年部の方も一緒に参加してくれたことで盛り上がる事ができた。

## ③聴覚障がい者や手話通訳士による講演会

手話の歴史などを踏まえた講演や、聴覚障がい者で防災士の資格を有する方から災害に対する備えや災害時の聴覚障がい者への対応などについて講演いただいた。手話通訳士の方からは、「手話通訳士になったきっかけや手話通訳士の役割・活動についてお話を伺った。また、講師の方がいらしたときは、司会なども担当し手話の技術をあげるように努めた。これらの講演会は地域の方にも多数参加してもらうことができた。

## ④手話の普及活動

10月19日イオンモール高知で開催された体験型イベントふくしフェア 2024 では、約 1,000 人の方に手話での挨拶や指文字での名前を体験してもらった。なかには、昨年も参加し、その時覚えた手話を披露してくれた子どももいた。また、こども食堂などで手話による「本の読み聞かせ」を行い、子どもの時から手話に親しんでもらえるように努めた。12月26日には、高知県手話言語条例が施行され、そのPR動画である「手話ではなそう」防災編～高知県立大学手話サークルのみなさんといっしょに～に手話サークルの学生が登場し手話が言語であることをPRした。

## ⑤その他

「中央地区社会教育委員連絡協議会研修会講師」「スマイリング交流」「ボランティア研修会」「高知県聴覚障害者協会青年部交流会」などに参加した。

## (3) 活動評価

手話の技術の向上については、検定試験に合格しただけではなく、積極的に勉強会に参加することや手話歌に取り組む姿勢が伺えたことで手話を学ぶ機会を多く得た。そのようなことから目標①②は達成できたと考える。また、目標③についても、ふくしフェア 2024 で手話コーナやこども食堂での手話による「本の読み聞かせ」などで幅広い世代の方に手話を身近に感じてもらうことができたと考える。また、本年度は計画していた活動以外に講義依頼や高知県手話言語条例PRの動画への参加なども行い、手話を地域の方に知ってもらうきっかけづくりに貢献できたと考える。

## (4) 今後の課題

立志社中として2年目であったが、昨年度以上の活動ができた。しかし、学外での活動となると参加する部員が少なく、限られた部員となっている。まだ、手話を勉強中である部員も多く、その部員が継続して手話を学べる環境を継続して行くことで、学外での活動に参加できるように努める必要があると考える。

来年度は、高知県手話言語条例が本格的に開始となるため、地域の方に手話を「言語」として理解してもらえるように積極的に関わっていきたいと考える。